

博士 論文審査結果報告書

報告番号

学籍番号 1027022036

氏 名 橋本 かほる

論文審査員

主 査(教授) 染矢 富士子

副 査(教授) 少作 隆子

副 査(教授) 能登谷 晶子



論文題名 : Long- term language abilities of subjects with hearing impairment trained by the written- oral language method 文字-音声法による訓練を受けた聴覚障害者の言語能力の長期経過

【論文内容の要旨】

はじめに：言語機能は高次脳機能の主要な一つであり、言語障害の出現率の中で最も高いものは聴覚障害である。聴覚障害者の言語能力(VIQ)は、一般的に健聴者に比し低いといわれ、潜在的な知能の高さ (PIQ) や、訓練開始年齢、聴力レベルが言語獲得のための影響因子とされてきた。目的：乳幼児期から文字言語を導入した文字-音声法（金沢方式）による言語訓練を就学まで受けた聴覚障害者 30 名の音声言語能力について、9 歳以降の言語成績を調査し、幼児期の文字言語理解力の長期的な音声言語理解力への影響について分析した。方法：言語性知能(VIQ)と動作性知能(PIQ)を測定する方法として、ウェクスラー-知能検査を使用し、一対一の対面にて行った。統計処理は、ピアソンの相関係数を用い WISC-III, WAIS-III で結果が得られた VIQ と PIQ, 読書力検査で結果が得られた読書力偏差値との関係を調べた。VIQ に影響を与えると考えた因子として訓練開始年齢、平均聴力レベル、PIQ, 読書力偏差値を独立変数として選出し重回帰モデルを作成した。さらにステップワイズ法にて詳細を検討した。いずれも危険率 $p < 0.05$ を有意差ありと判断した。結果および考察：VIQ 値の中央値は 93.1 で、対象者の 80% が平均以上の範囲にあった。読書力偏差値の中央値は 53.86 で対象者の 80% が平均以上にあった。PIQ と VIQ は有意な相関がなかった。読書力偏差値は VIQ と有意な相関をみとめたが、PIQ とは無相関であった。VIQ 値に影響する要因の検討では、読書力偏差値のみが選択され、寄与率は 0.57 であった。Step-Wise 法においても、読書力偏差値のみが選択された。寄与率は 0.545 で VIQ への影響因子の中で読書力偏差値が有意に影響を与えることが明らかになった。VIQ の獲得は訓練開始年齢、聴力レベル、PIQ に影響されないという本研究結果はこれまでの報告とは異なるものであった。また、6 歳時の読書力偏差値は 9 歳以降の VIQ と高い正の相関を示し、読書力偏差値、VIQ とともに 80% のものが平均以上の成績にあった。本研究は、これまでにわれわれが報告した聴覚障害児の文字言語理解の獲得を支持できる結果であり、聴覚障害児が音声言語を獲得する上で、幼児期から文字言語モダリティを導入することの有効性を示唆できる報告である。【審査結果の要旨】本研究はこれまで我が国で検討されたことのない、1 つの訓練方法による長期的な言語習得の研究である。以上、学位請求者は本論文の論文審査及び最終試験の状況に基づき、博士（保健学）の学位を授与するに値すると評価する。